Wリーグに初のママさんプレーヤー誕生 女性の活躍は社会問題解決に欠かせない

結婚と出産によるブランクを経て、国内最高峰の女子バスケットボールリーグに復帰した選手がいる。輝きを以て社会で活躍している姿から学べることは多い。

出産後に復帰した女性プロスポーツ選手

女子バスケットボールの最高峰、Wリーグで、日本人史上初のママさんプレーヤーが誕生した。以前、この東光西風でも取り上げた、富士通レッドウェーブの前澤（旧姓篠崎）澪選手である。

彼女は、東京五輪の3×3の日本代表として活躍し、2022年春に引退したが、4シーズンぶりに復活したのだ。前澤選手は、引退前に既に結婚していて、夫の仕事について行く形で青森から在宅で富士通の仕事をしていたらしい。その間に2023年4月に出産、2024年には現役復帰を決心し、2025年シーズンから復帰した。

欧米の女子スポーツでは、プロのバスケットボールやサッカーでも、子持ちで活躍している選手は多いと聞く。しかし、日本では非常に珍しいケースである。子持ちどころか、現役時代の激しいトレーニングがもとで、長期間生理不順などに悩まされる選手も少なくない。

子育ての環境としても、日本はなかなかに厳しい。日本は海外と比べて、ベビーシッターなどが普及しておらず、母親の負担はかなり大きい。日本の普通の女性にとって、乳幼児を一人育てること自体がすさまじく体力を削られる作業であり、そんな中でプロスポーツをやろうという発想が出て来ること自体がほとんどないことかもしれない。

しかも彼女は、バスケットボール選手としては、体格的にかなり小柄であり、3ポイントシュートなどの長距離砲が特別得意なわけではない。彼女は、頑丈な身体と豊富なスタミナと得点への嗅覚で、ガンガン切り込むタイプの選手だから、そんな選手が3シーズンも現役から離れて、妊娠・出産・子育てをしていたら、超一流のリーグで通用するはずがないの

だ。しかも、復帰した後も、当然家に帰ればお子さんが待っている。かなり過酷な状況であることは間違いない

家族のサポートが不可欠

しかし、彼女が持っていたアドバンテージもある。それは、家族のサポートがあったということ、彼女のご主人さんも、両親も、「子育ては最大限協力するから、絶対現役復帰したほうが良い。復帰したいのに、復帰しなかったら後悔する」と背中を押してくれたという。「篠崎澪」という名前は圧倒的なネームバリューを持っていたが、彼女は、家族のサポートへの感謝の念を込めて、登録名を結婚後の「前澤」姓にしたと言う。

子どもを幼稚園に送る親子。準備や移動にかかる労力は大きく、家族の支えが大切である。

また、彼女がすさまじい努力の鬼であるという点も大きいだろう。一度目に引退する前から彼女は、周囲の人間が引くほど、限界まで自分を追い込むトレーニングをすることで有名だった。子育ての合間を縫って衰えた体力や反射神経を、最高峰のリーグ通用するレベルまで鍛え上げることは、並大抵の努力で出来ることではない。

また、富士通の監督にも恵まれたと言えるかもしれない。彼女をルーキー時代から育て上げたBTテーブスヘッドコーチは、昨季限りで富士通の監督を引退した。BTテーブスは、昨季までに富士通をWリーグ2連覇に導いた名将だが、どちらかと言えば固定メンバーを酷使する傾向があった。新しくヘッドコーチに就任した小滝氏は、スターターも控えも満遍なくタイムシェアをするタイプの監督である。以前は花形プレーヤーであった前澤も、さすがにスターターにはなれない。

しかし、タイムシェアをする小滝監督のもと、十分なプレータイムをもらいながら、徐々にWリーグに順応していった。彼女の爆発力はいまだに健在であり、控え選手とはいえ、前澤がチームハイの得点を記録することもしばしばある。

女性の良さが活きる社会を目指そう

引退前の前澤は、あまり周囲とコミュニケーションをとるタイプではなく、自分を限界まで追い込む背中を見せることで、チームを引っ張る選手であった。しかし、出産後の前澤は、若いチームメイトに積極的に話しかけ、チームの潤滑油となっている。母親となった経験が、こういうところにも表れているのかもしれない。

現在、日本の総理大臣や財務大臣も女性であり、女性の活躍が目立つ昨今ではあるが、Wリーグの世界でも、ママさんプレーヤーが誕生したことは、女性の社会進出として、大きな節目となったことは間違いない。

（増田千代）